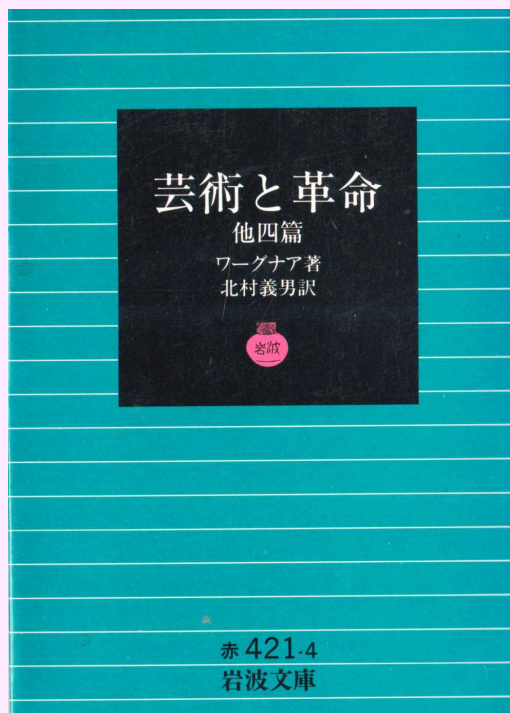


# ワーグナーの革命

## 恋愛を禁制にした理由

2022/11/03



### ワーグナーの若書き喜劇的オペラ《恋愛禁制》

今日、2022/11/03 は全国的に文化の日です。「文化」とは、文章や話し合いで相手を感じ化することです。文化の反対語は、「武化」です。話し合いで相手を感じ化出来なければ、武力に訴えて無理矢理言うことをきかせるより他ありません。いま、世界で流行っているのは、この武化です。今日もまた、世界は「武化の日」です。今週末のNHKの土曜講座では、まだ、ワーグナーのもう一つの喜劇《恋愛禁制》(1836年初演)を観ています。《恋愛禁制》の他のもう一つの喜劇とは、むろん、《ニュルンベルクのマイスタージンガー》(1867年初演)です。ワーグナーの書いた喜劇はこの二つです。《ニュルンベルクのマイスタージンガー》は上演時間260分で、《恋愛禁制》の上演時間は171

分です。《マイスタージンガー》はワーグナーが 53 歳のときに書かれ、間違いなく彼の「楽劇」であり最高の喜劇的オペラです。23 歳のときに書かれた《恋愛禁制》は若書きのオペラで、古風な様式の二幕の喜劇オペラで、各歌や曲毎(ごと)に独立した、「ナンバー・オペラ」です。楽劇とはいえません。それで、《マイスタージンガー》とは比較にならない「第2喜劇だ」と言われざるを得ませんが、実は、この《恋愛禁制》こそが、ワーグナーの「喜劇の本領」、すなわち、「芸術革命」を構想した作品であったのです。

## フランスの七月革命

ワーグナーが生きた 19 世紀はオペラの時代でした。そして、革命の時代でもありました。フランスでは、18 世紀の英国の産業革命とフランスの革命の「大革命」を経ても、いまだに政局が安定せず、再び王制が復活して、シャルル 10 世が反動政治を推し進めました。王は、1830 年にオスマン帝国が支配しているアフリカのアルジェリアへ遠征して国威を高めようとしたが、返ってパリの市民が不満をもったので「七月勅令」を発して議会を解散し選挙権を縮小しました。それに対して学生や労働者を中心にしたパリの民衆はそれに反発し、三色旗を翻しテュイルリー宮殿と市庁舎を占領しました。ギロチンを怖れる国王シャルル 10 世は退位します。「国民王」ルイ・フィリップが新国王となって、自由主義と立憲王制を採用してここにフランスは立憲君主制に移行しました。

## フランスの二月革命

この「七月王政」のフランスは、大銀行家や商工業者などのブルジョワの世界でした。1847 年に成立し反動的なギゾー内閣は、選挙権の拡大を拒否したり「改革宴」という集会を禁止しました。これに対して、1848 年 2 月、パリ市民は武装蜂起しました。国王ルイ＝フィリップはイギリスに亡命し、共和政の臨時政府が樹立しました。これが、「二月革命」です。このフランスの二月革命の影響を受けて、ドイツ各地でも市民革命が勃発しました。オーストリアの首都ウィーンでは 3 月 13 日に市民の蜂起があり、メッテルニヒが追放されてウィーン体制は崩壊しました。プロイセンでも 3 月 18 日に首都ベルリンで民衆が蜂起して、国王フリードリヒ・ヴィルヘルムに憲法制定を約束させました。

## 革命家ワーグナー

1843 年 2 月、ワーグナー(30歳)は、ザクセン王国の宮廷楽団であるザクセン国立歌劇場管弦楽団の指揮者に任命されました。フランスの「二月革命」の余波を受けて、1848 年 3 月にドイツで「三月革命」が起きます。ワーグナーは、これに影響を受けた改革論者たちの「祖国協会」に加入していました。ワーグナーは 5 月に宮廷劇場に代わる「国民劇場」を大臣に提案しましたが却下されました。ワーグナーは祖国協会で、「共和主義の目標は貴族政治を消し去ることであり、階級の撤廃とすべての成人と女性にも参政権を与えるべきであり、プロイセンやオーストリアの君主制は崩壊するべきだ」と演説で述べたので共和主義者と王党主義者から激しく攻撃されました。劇場関係

者たちは、「ワーグナーは即刻罷免すべきだ」といいました。1849年5月にドレスデンで革命軍が蜂起して、ワーグナーもこれに参加してバリケードの前線で主導的な役割を果たしました。ドレスデン国王が招いたプロイセン軍が街を襲いました。ワーグナーは生命からがらドレスデンを脱出しましたが、指名手配を受けて、ドイツを捨て、スイスのチューリッヒに亡命することになりました。ここで、革命家としてのワーグナーは政治的な革命に失敗して、いよいよ、芸術的な革命家となってさらに飛躍を遂げます。

## ワーグナーの革命論集

いまここに、ワーグナーの「革命論」を一冊にまとめた岩波文庫『芸術と革命他四編』（1953/1996）があります。ここには、ワーグナーが書いた革命に関する論文が五編収録されています。『共和主義の運動は王権に対していかなる関係にたつか』（1848年ドレスデン新報）と『人間と現在の社会』（1849年民衆新聞）と『革命』（1849年民衆新聞）と『芸術と革命』（1849年刊行）と覚え書『「芸術と革命」のために』（遺稿）の五編です。

このなかで、もっとも大事な論文は『芸術と革命』です、この『芸術と革命』はワーグナーの主張である『未来の芸術作品』（1850年）の序文をなすもので、主に「オペラハウスを作れ」ということにつきます。ワーグナーの本当の未来の芸術作品とは彼の楽劇だけを上演する「パイロイト祝祭劇」の建設であることが分かります。

二月革命はパリの劇場から公共の関心をうばいさった。劇場の多くはまさに閉鎖されようとした。六月暴動ののちには、カヴェニャックが、現在の社会秩序を維持することの委託をうけて、劇場を支持し、劇場が存続するための支援を要請した。なんのためであろうか。失業が、無産階級が劇場閉鎖によって増大するであろうからである。してみれば国家が劇場につないでいるのはこのような関心だけである！ 国家は劇場を産業施設と見ているのだ。しかし同時にまた、激昂した人間悟性の危険な活動を封ずる、精神を鈍らせ運動を吸収する有効な転向薬とみるのである。深刻な不満な気持で、たとえわれわれの非常に目的にかなった劇場営造物の存続を犠牲にしても、恥ずかしめられた人間の本性を再び自己に還らせるべき手段方法を熟慮している激昂した人間悟性の危険な活動を封ずる時、転向薬とみているのだ！ [63頁]

文章がなかなか難しくて分かりづらいのは、翻訳が古くて悪いだけではなく、ワーグナーの原文そのものも分かり難いからです。しばし、我慢してお付き合いください。以下の文は重要で、まさにパイロイト祝祭劇場設立の主旨、そのものです。

劇作家の創作するものは、それが公衆の面前で実演されることによって始めて真に芸術作品となる。そして劇場作品は劇場を通してだけ有効になるのである。しかるにあらゆる芸術の助けを意のままに処理するこの劇場は昨今はなんであるのか。それは産業的企業である。しかも、国家あるいは王侯がそれを特に義損(ぎえん:被災者救援などを目的として金銭を寄付すること)する場合でさえそれである。この産業的企業の指導は、多くは、侍従の勤めの秘伝における、あるいは類似の職務における自分たちの知識を、劇場

の品位を理解するためにみがいておかなかった場合には、昨日は穀物の投機に采配をふうかと思えば、明日は砂糖の相場に充分おぼえこんだ知識をささげるといった人々にまかされるのである。劇場においては、公共性の有力な性格にしたがって、しかも劇場支配人に課せられた強制のために、有能な商人的投機師としてだけ観衆と交際し、資本にたいして利潤をあげるために貨幣流通の手段以外にはなに物も見られないかぎり、かかる点において有能なものにだけ劇場の管理が、つまり搾取がまかされるということは、もちろん理の当然である。その理由は、真に芸術的な管理では、したがって劇場の本来の目的にふさわしい管理では、劇場の近代的目的を追求することはもちろん非常にむずかしいであろうからである。しかしながらこのためにこそ、劇場が、なんらかの方法でその当然のけだかい使命に向けられるべきであるならば、産業的投機の強制から全く解放されなければならないということは、賢明な人はだれでもこれを理解するにちがいない。[85頁]

### 《恋愛禁制》の主題としての革命

実は、もう一つ、これらの論文で書かれていることワグナーの革命は、「教会の否定」でした。教会は、人々の官能や美意識や芸術的な喜びを異端で異教徒的なものと表明していたからです。教会は、あつかましい嘘つきな偽善者であって、人々の純化した芸術本能を「聖化」するのだとワグナーはいうのです。この主張は、《恋愛禁制》の主題である「清教徒的快樂純化」として現れているのです。

教会の信仰の火が燃えつきてしまったときにはじめて、すなわち教会があつかましくもわずかに、感覚的に知覚可能の世俗的専制主義にすぎないことを表明したとき、しかも教会によって聖化された、同様に感覚的に知覚可能の、世俗的君主専制主義と結びついてそれを表明したときにはじめて、諸芸術のいわゆる再生がはじまることとなった。なんでこのように長いあいだ頭を悩ませたかを、ついに人々は、世俗的に豪奢な教会そのもののようになまじまじと、眼前にこれを見ようと思ったのである。ところがこのことは、人々の眼がひらけ、かくして官能が再び正常に取りあつかわれることによって可能になったにはかならないのである。いまや純化された空想の産物である信仰の対照が、感覚的に美しく、そしてまたこの美しさにたいする芸術的な喜びをもって、人々の眼前におかれたことは、キリスト教そのものの完全な否定であった。そしてまた芸術創作への指導が、ギリシヤ人の異端の芸術そのものからとられなければならなかったという事実は、キリスト教の不面目きわまる屈辱であった。しかしそれにもかかわらず、教会はこの新しく目ざめた芸術本能をわがものとし、かくして、異教徒の見なれない羽根で身を飾り、あつかましい嘘つきで偽善者であると自称することをばからなかった。[54頁]

【都築正道】